

第 12 回 *De Profundis* の紹介

(1) *De Profundis*

De Profundis はいわくつきの作品であるが、一般的には次のようにとらえられている。

A . ダグラス卿との同性愛事件で有罪判決を受けたワイルドは、1895 年から 2 年間に獄中に服役した。獄中で記されたダグラス宛の書簡である本作品は、ワイルド自身による私的な事柄の記述であり、苦悩と自負とを自嘲的に告白し、人生観・芸術観・宗教観などが述べられている。⁽¹⁾

De Profundis がダグラス宛の書簡である点が、これまでの戯曲、小説、童話評論、講演と違ったところである。特に、「彼の思想・才能が十二分に発揮されたものであり、深い淵の底からの芸術家としてのワイルドの告白であり、心の変遷として、また足跡の記録として考えらえる」⁽²⁾とある。また、*De Profundis* 出版の経緯については、以下の通りである。

Published: On 23 Februray 1905, Methuen & Co. issued this letter in book form, drastically cut by Robert Ross to less than half the length of the original MS. With all references to Douglas, including the salution “Dear Bosie,” removed. Before the English edition appeared, an authorized translation in German by Dr. Max Meyerfeld had been published serially in Berlin in *Die Neue Rundschau*, (Jan.-Feb.1905), which contained more of the original text than the English version.⁽³⁾

さらに、次のような事情もあった。

In 1913 further material from the original MS. of *De Profundis* was added in a limited edition published in New York. In 1949, Vyvyan Holland published Ross's typed copy, erroneously describing it as the "first complete and accurate version." Finally, Hart-Davis's 1962 edition of Wilde's letters contained a reliable transcription of *De Profundis* from the original autograph MS. in the British Museum. (4)

De Profundis が完本として世に出るのは、1905年から約60年後の年月がかったことになるのだ。

(2) 夏目漱石

明治時代のワイルド紹介の中でも特に注目しておきたいのは *De Profundis* の受容である。日本でも *De Profundis* の出版を契機に早くも明治39年(1906)9月の『新小説』(第11年第9巻)に紹介された。夏目漱石の「草枕」が掲載され、文中に「基督は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー、ワイルドの説と記憶してゐる」(5)との紹介もある。*De Profundis* との明記はないが日本に於ける最も早い *De Profundis* の紹介でもあろう。漱石による紹介は以下の原文を紹介したことになる。

... the very basis of his (Christ's) nature was the same as that of the nature of the artist (6)

漱石は明治33年(1900)にロンドンに留学し、帰国後の明治38年(1905)に『吾輩は猫である』、『倫敦塔』、明治39年(1906)に『坊っちゃん』、『二百十日』などを発表している。『倫敦塔』の中ではワイルドの言及はないものの、マックス・ノルダウへの言及がある。

此響き群集の中に二年住んで居たら吾が神経の纖維も遂には鍋の中の蕨海苔の如くべとべとになるだろうと、マクス・ノルダウの退化論を今更の如く大真理と思ふ折さへあった。⁽⁷⁾

ノルダウは『退化論』の中でワイルドについて論じているのである。ノルダウについては、明治35年(1902)10月の『学鐙』(第65号、丸善)にはノルダウの著書3冊の広告が掲載されている。*Paradoxes, Conventional Lies of Our Civilization, Degeration*の入荷案内がある。⁽⁸⁾ノルダウの著書が日本へ入って来たのは、*De Profundis*の出版前であるが、漱石の英国留学後のことである。「草枕」における*De Profundis*への言及では、キリストへの言及は注目に値する。

...キリストを芸術家と同じ位置に据えてみているワイルドの独自な見方にたいして興味を覚えた、いわばこれまで漱石のもっていたキリスト観に照らしてどこかで響くものがあったと思われる。この時期の漱石のキリストに対する見方、関心の抱き方は如何という問題、これは内面の必然の糸を辿ってゆかねばならぬ大きな問題であるが、いまはそこまで深り下げる必要はない。ただ英文学を学び、英国で留學生活を送ってつづさに外国の体験をしてきたこの期の漱石にとって、現実生活の次元からせまってくるという必然からも、キリスト教及び聖書というものへの関心はつねに心を領していたことは当然であった。⁽⁹⁾

夏目漱石における*De Profundis*への波動については1968年3月の井村君江「夏目漱石とオスカ・ワイルド - わが国における『獄中記』の波動(第二部)」(『鶴見女子大学紀要』第5号)がよい参考となる。

(3) 平田禿木

明治 40 年(1907)5 月には平田禿木「英国詩界の現状」(『明星』末歳第 5 号)が発表され、*De Profundis* が出版された明治 38 年(1905)に留学先のイギリスでこの本と出会ったことを記している。こうした現象は *De Profundis* の出版がワイルドの再評価につながり、紹介されたと考えてもよいだろう。

一九 五年春二月の頃 *De Profundis* なる異常な一本が英の文界を騒がせた⁽¹⁰⁾

平田禿木は *De Profundis* をきっかけにワイルドの他の作品がどんなものがあるのかといったワイルドの再評価への道を辿ることとなった。

さらに、明治 41 年(1908)8 月の『趣味』(第 3 巻第 8 号)の「文芸界消息」には

平田禿木氏はワイルドのプロファンデスを翻譯すべく、小林愛雄氏はサロメを訳しつつありと。⁽¹¹⁾

との広告が出ている。この広告は平田が明治 41 年(1908)6 月 24 日～26 日に『東京二六新聞』に「詩人オスカー・ワイルド」(上)(中)(下)を連載した後に出されたものである。もちろん、平田は大正 9 年(1920)11 月に *De Profundis* を『新生』(上)(アルス英文叢書)、大正 11 年(1922)年 1 月に『新生』(下)(アルス英文叢書)と題して世に送り出し、大正 14 年(1925)8 月に『ドリアン・グレエの画像』(国民文庫刊行会)の中で「獄中より」を所収し、出版している。

(4) 西田幾多郎

西田幾多郎(1870-1945)は明治 42 年(1909)7 月の『丁酉倫理講演集』(第 82 集)の「神と世界」で *De Profundis* への言及がある。

余はここにおいてオスカル・ワイルドの『獄中記』 De Profundis の中の一節を想い起こさざるをえない。基督は罪人をば人間の完成に最も近き者として愛した。...(省略)... ワイルドは罪の人であった、故に能く罪の本質を知ったのである。(12)

これは明治44年(1911)1月の『善の研究』(弘道館)に収録されることになった。西田は禅の体験とヘーゲル的な哲学観を基礎にして、東洋思想と西洋思想を融合させようとしたことで知られる。当時の知識階級人がワイルドの作品を読んでいた一端をここに見ることができよう。

(5) 生田長江

生田長江(1882-1936)は後年、ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)の作品を初めて邦訳したり、明治41年(1908)10月の『外国文学研究法』(新潮社)、大正10年(1921)8月には森田草平(1881-1949)、野川白川(1883-1950)、昇曙夢(1878-1958)と共に『近代文芸十二講』(新潮社)も世に送り出している。また、大正期には平塚らいてう(1886-1971)を中心とした『青鞜』の名付け親でもある。

生田長江は明治44年(1911)6月の『帝国文学』(第17巻第6号)の「藝術家としての耶穌」を発表している。これは講話会の内容をまとめたものだ。その中で *De Profundis* への言及がある。

基督をアアティストとして見るといふのは、オスカー・ワイルドの『フロファンデイス』の中にもある見方だと思ひますが、それと私の見方とどれだけ近寄つて居るか、今オスカー・ワイルドの考思ひ出しませんから、或は同じやうなことを申すかも知れませぬ。それを構はずに申します。

私は基督の生涯を藝術的である、そうして基督は、非常に大きい、私共が知る誰よりも大きい、藝術家であると申したいのであります。で、どう

いふ點からさう云ふ事をいふか、色々上げたいが、其中の一つを、最も大切な箇條を申したならば、耶穌がドウリイマアとして、素晴らしく大きな人であるといふことであります。それが一番大きい條件であります。(13)

また、「ドウリイマア」についての説明もする迄もないと言いながらも、説明も行っている。

ドウリイマアといふ言葉の意味は説明する迄もありません。さうして此ドウリイマアといふ者はアアテイストの本質である。大切な本質である。他の事は措いて基督は、非常なる理想家である、空想家である、非常にイリュウジヨンに耽つた人だといふことだけでも、あの人を大きな藝術家として、さう見る大切な理由にすることが出来ると思ふのであります。(14)

(6) 本間久雄

明治44年(1911)10月に本間久雄は『早稲田文学』(第71号)に省略版として *De Profundis* の翻訳を發表し、翌年、新潮社より単行本として出版した。翻訳の冒頭とその原文を紹介しておくことにする。

悉ては一昨年、霜月の初めに起つたのだ。かくも隔つた月日と私との間に、生命の大きな流水が流れて居る。卿等は、かやうに隔つた月日を通しては、殆んど何をも観取し得ないであらう。けれども、私に取つては、すべては昨日と云はず、今日起つた出来事のやうに見える。艱難は一種の長い瞬間である。時期に依つて分ち得らるるものでもなく、吾等はたゞそのさまざまなる心持ちを筆に止め、面もそれからもるもるの心持ちの轉廻を記録し得るのみである。(15)

All this took place in the early part of November of the year before last. A great river of life flows between you and a date so distant.

Hardly, if at all, can you see across so wide a waste. But to me it seems to have occurred, I will not say yesterday, but today. suffering is one long moment. We cannot divide it by seasons. We can only record its moods, and chronicle their return. (16)

本間のワイルド研究の軌跡を見ると、*De Profundis* という作品は大きな意味を持つことになる。本間はワイルドの芸術観を *The Decay of Lying* から紹介していたが、その後、*De Profundis* により悲哀を通しての「芸術即人生、人生即芸術」といったワイルドの芸術観が人生観のものへと発展していく様を追究していくことになる。

(7) 島崎藤村

島崎藤村(1872-1943)のワイルド受容は *De Profundis* に集約されるといえる。(17) 藤村は前述の『早稲田文学』に発表された本間久雄訳「獄中記」との出会いが大きなきっかけであった。

最も私の心を慰めたものは、本間久雄君がが譯したオスカア・ワイルドの『獄中記』であつた。私は床上であるの翻譯を讀むのを楽しみとした。(18)

これは明治45年(1912)4月の『中央公論』(第27巻第4号、中央公論社)に掲載された随想「日光」の一節である。この随想は後に「柳橋スケッチ」に収められ、大正2年(1913)4月に出版された島崎藤村『微風』(新潮社)に収載された。さらに「日光」を見てみよう。

いかなる苦痛も、それが自己のものであれば、尊いやうな気がする。すくなくも人は他人の楽しみも勝つて自己の苦みを誇りとしたいものである。し。しかし私は深夜獨り床上に座して苦痛を苦痛と感ずる時、それが麻痺して自ら知らざる状態にあるよりは一層多く生くる時なる感ず

る度に、斯くも果てしなく人間の苦痛が續くかといふことを思はずには居られない。⁽¹⁹⁾

その後、*De Profundis* からの引用をさらに続け、その面白味について述べている。

『獄中記』の面白味はそれから更に始めやうとしたところにある。彼は悲哀のかずゝも、一生の根柢に横はれる苦痛も、拭ひ難き恥辱も、墮落も、隠れた卑しき行ひも、罪惡も、乃至身に蒙れる刑罰までも、直ちにそれを靈的な意味あるものに化さうと努めた。彼の『新生』とは人生を以て藝術の形式と成すにあつた。斯くして始まる藝術生活は結局一種の作り物語であらうと思ふけれど、彼の所謂智力的勇悍には動かされる。⁽²⁰⁾

島田謹二は『島崎藤村事典』の中で次のように述べている。

ワイルドは生まれながらの文士である。価値はずいぶん高い。そういうところも藤村とよく似ている。眞実な芸術家は、その生涯がひとつの芸術品であるという説は、藤村に波動している。この説に立つとき、快樂はあくまでも追求してよいことになる。そのために生ずる内面的没落を、日本の社会的風土を背景にして書いたのが、『新生』の書き出しである。これは、一種の自己批判の書物であるが、妙に不健全な印象を与えるのは、日本に特有な暗い運命觀のゆえんだらうか。⁽²¹⁾

島崎藤村がワイルドに惹かれた要因のひとつには、明治 38 年（1905）～明治 44 年（1911）の時期に悲劇のような事態が藤村の周辺に連続して起きたことが考えられる。明治 38 年（1905）5 月に三女・絹子（1 歳）死去、明治 39 年（1906）4 月に次女・孝子（4 歳）死去、6 月に長女・みどり（6 歳）死去。明治 43 年（1910）5 月に甥・高瀬親夫死去、8 月に妻・冬子（33 歳）死去。

明治 44 年（1911）には三兄・友弥が死去しているのである。

田中富次郎もこの「日光」のとらえ方について以下のように述べている。

こうした妻や子の死の回想にまわりつく暗い心から、『微風』前半の作品は、おおむね発想されている。この「日光」は、それを、いち早く示した作品であるといえる。

次に、この作品は、暗い心を慰めるものとして、本間久雄訳の『獄中記』にふれ、（芸術を以て最高の現実となし、人生を以て作り物語の単なる様式となした）あるいは、（「新生」とは人生を以て芸術の形式と成すにあつた）というワイルドのことばを拾って、それに同感している。芸術生活の実現と、それを宗教的生活に融合しよとするワイルドの思想から、藤村が、種々な暗示を得ようとしているからである。あるいは、『破戒』の犠牲者となった妻や子をしのびながら、藤村が、芸術的生活を実現するためには、冷静な観察者となることもやむをないのではないかと模索しているからである。しかも、それが、単に模索だけであわっていない。⁽²²⁾

藤村は同じ明治 45 年(1912)4 月 7 日の『読売新聞』(日曜附録)に「オスカア・ワイルドの言葉」を紹介している。これは「新片町より」と題して、18 編の文章が寄せられたもので、大正 2 年(1913)4 月に『後の新片町より』(新潮社)に収載されたものである。平成 1 年(1989)4 月の十川信介編『藤村随筆集』(岩波書店)にも収載されている。

オスカア・ワイルド曰く、

「私は心から自己実現の清新なる様式を求めている。私が現在の要求はこれである。而して先ず第一になさざること、世間に反抗せんとする苦い反撥の感情を脱し去ることである。」

これほど反抗の精神に満ち溢れた言葉を、めったに私は見たことがない

しかも自由な感情の発露と、多分な涙のかがやきとを以て。(23)

このワイルドの言葉は先に紹介した「日光」ではなく、本間久雄訳「獄中記」にも訳されていないが、*De Profundis* からのものである。(24) 原文は

My nature is seeking a fresh mode of self-realisation. That is all I am concerned with. And the first thing that I have got to do is to free myself from any possible bitterness of feeling against. (25)

である。さらに 18 編の中には「自由」と題する随筆もある。これも紹介しておきたい。

眞に人の自由な時とは、努めずして自由な時だ。オスカア・ワイルドの口吻をかりて言へば、自由を想像するに止まらずして、それを實現する時だ。(26)

この「自由」については、これまでの「オスカー・ワイルド書誌」でも紹介されていない。

明治 45 年の藤村の「日光」「オスカア・ワイルドの言葉」を見ると、*De Profundis* からの波動を感じることができよう。『新生』は大正 7 年(1918)に連載され、大正 8 年(1919)に春陽堂より刊行された。また、ワイルドとの比較からよく取り上げられる『新生』について少し触れておくと、伊東一夫編『島崎藤村事典』の「新生」の項目には以下のようにある。

明治末期の藤村が、ワイルドの唯美主義を吸収し、ボードレールの象徴美的世界に深く心酔し、<汝、わが悲哀よ、猶賢く静かにあれ。>のボードレールの言葉を信条のように愛誦し、<赤熱の色に燃えてしかも凍り果るといふ太陽>におのが孤独の心を託して、芸術の国フランスに漂泊の旅

を続けたことに注目するならば、その芸術上の評価は別として、『新生』は「悪の華」と同列におくべき新しい作品でなくてはならない。『新生』は、すでに吉江喬松が「芸術と現実となりアリズムでもなければロマンティズムでもなく、その両者の融合のうえに築かれた象徴主義的方法によって、孤独な漂泊者の内面の音楽を表現した散文的恋愛詩であるとみることができ。(27)

さらに、藤村自身の筆に注目するとすれば、『新生』でのペエル・ラセエズに関する「附記・語註」であろう。『藤村全集』(第7巻)に収載された『新生』の(88)と(102)のところにペエル・ラセエズに関する記述がある。本文で「あの二人の恋人の墓」(28)、「アペラアルとエロイズの墓サ」(29)とあるが、『新生』の第1巻(前篇)の初出(原稿)にある「附記・語註」によれば、(88)には以下のような説明がある。

巴里のペエル・ラセエズの墓地には名高い人達が葬つてある、オスカア・ワイルドの墓などもそこにある、死の門(モニュマン・オー・モオル)は彫刻家バルトロメエの作。アムウルは愛を意味するが、男女の関係などに用ゐられる場合も多く、一語多義である。(30)

藤村は大正3年(1914)夏にこのペエル・ラセエズの墓(Cimetière du Père Lachaise)を訪ねている。『新生』の中でワイルドの名前こそ出さないが、藤村がワイルドを意識していたことは明らかである。

参考資料

井村君江「わが国における『獄中記』の波動(第一部)」(『鶴見女子大学紀要』第4号、1967年2月)

島崎藤村『藤村全集』(第5巻)(第6巻)(第7巻)筑摩書房、1967年4月

- 井村君江「島崎藤村とオスカ - ・ワイルド - - わが国における『獄中記』の波動(第三部)」(『鶴見女子大学紀要』第6号、1968年12月)
- 井村君江「佐藤春夫とオスカ - ・ワイルド」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院、1968年3月)
- 兼武進「ワイルドの『獄中記』と西田幾多郎の『善の研究』」(『跡見学園短期大学紀要』第30集、1994年1月)
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、1999年6月)

注

- (1) 安藤千春「『獄中記』」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月), p.549.
- (2) Ditto.
- (3) Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia*. (New York: AMS Press, 1998), p.70.
- (4) Ditto.
- (5) 夏目漱石「草枕」(『新小説』第11年第9巻), p.120.
- (6) *Complete Works of Oscar Wilde*. New York: Harper & Row, Publishers, 1989, p.923.
- (7) 夏目金之助「倫敦塔」(『帝国文学』第11巻第1号、大日本図書、1905年1月), p.10.
- (8) 善六「陳列場たより」(『学鐙』第65号、丸善), pp.26-27.
- (9) 井村君江「夏目漱石とオスカ - ・ワイルド - - わが国における『獄中記』の波動(第二部)」(『鶴見女子大学紀要』第5号、1968年3月), pp.81-82.
- (10) 平田禿木「英国詩界の近状」(島田謹二・小川和夫監修/平田禿木『平田禿木選集』第2巻、南雲堂、1982年3月), p.365.
- (11) 「文芸界消息」(『趣味』第3巻第8号、易風社、1908年8月), p.199.

- (12) 西田幾多郎「神と世界」(『丁酉倫理講演集』第 82 集、大日本図書、1909 年 7 月), pp.72-73.
- (13) 生田長江「藝術家としての耶穌」(『帝国文学』第 17 卷第 6 号、1911 年 6 月), P.496.
- (14) Ibid., pp.
- (15) 本間久雄「獄中記」(『早稲田文学』第 71 号、1911 年 10 月), p.200.
- (16) *Complete Works of Oscar Wilde* (New York: Harper & Row, Publishers, 1989), p.904.
- (17) 千田洋幸「島崎藤村」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997 年 10 月), p.518.
- (18) 島崎藤村「柳橋スケッチ」(『微風』新潮社、大正 2 年 4 月), p.305.
- (19) Ibid., pp.305-306.
- (20) Ibid., p.308.
- (21) 島田謹二「ワイルド」(伊東一夫編『島崎藤村事典』明治書院、1972 年 10 月), p.491.
- (22) 田中富次郎『島崎藤村』(作品の二重構造、桜楓社、1978 年 1 月), pp.102-103.
- (23) 島崎藤村『藤村全集』(第 6 巻)(筑摩書房、1967 年 4 月), p.144.
- (24) 本間久雄「獄中記」, p.206.
- (25) *Complete Works of Oscar Wilde*, p.914.
- (26) 『藤村全集』(第 6 巻), p.148.
- (27) 「新生」(伊東一夫編『島崎藤村事典』明治書院、1972 年 10 月), p.228.
- (28) 『藤村全集』(第 7 巻), p.170.
- (29) 『藤村全集』(第 8 巻), p.171.
- (30) Ibid., p.546.